

# 成人期知的障害者のコミュニケーションスキル向上に向けた 問題解決型の学習支援

—オープンカレッジ東京 2016「コミュニケーションの“わざ”」を通して—

○島田 博祐  
(明星大学)

平井 威  
(明星大学)

今枝 史雄  
(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)

菅野 敦  
(東京学芸大学)

KEY WORDS: 知的障害 コミュニケーション 問題解決

## I. はじめに

今枝ら(2016)は相談支援事業所を対象に成人期知的障害者の支援課題を調査し、就労に次いで対人関係の課題が多く挙げられているとしている。こうした課題を受け、成人期知的障害者の生涯学習支援の取り組みであるオープンカレッジ東京はコミュニケーションスキルの向上を目指して「コミュニケーションの“わざ”」を開催した。講座では言語・非言語的スキルを身につけるためのアプローチとして「動画を見て、直したらよいと思うポイントを受講生自身が見つける」という問題解決型の学習課題を設定した。

本研究では「コミュニケーションの“わざ”」の講座内容を報告するとともに、コミュニケーションに必要な観点の抽出プロセスの達成状況や学習内容の理解・一般化について検討することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 対象者

成人期知的障害者 43 名であった。本研究における課題は、対象者に対し、参加・協力の同意および学会発表の承諾を得た上で実施した。**2. 講座展開** 42 名が 10 班に分かれた。**1) 講義** 講師がコミュニケーションには言語・非言語によるアプローチがあることを説明した。**2) 個人ワーク** 「友だちを遊びに誘う場面」を設定し、誘う時の「距離」「声の大きさ」「表情」の 3 つをコミュニケーションに必要な観点とした。個人ワークでは以下の手順で、コミュニケーションに必要な観点を自ら抽出できるようにした。

**(1) 要素の抽出** コミュニケーションに必要な観点いずれかが「適切でない例の動画」3 種を視聴し、「直したらよいと思うポイント」を抽出した。困難な場合、観点名の挿入された付箋をヒントとして提示した。**(2) 要素の整理** 抽出したポイントをマトリックス表の行ごとに整理した。**(3) 観点名の命名** 要素の内容を基に、行ごとに観点を命名した。困難な場合、観点の書かれた付箋をヒントとして提示した。

最後に、3 つの観点が全て適切な動画を視聴した。**3) グループワーク** 必要な観点 3 つを基に、各班でロールプレイに取り組んだ。「誘う人」「誘われる人」「周囲の人」は交代制で、対象者は全ての役割を担えるようにした。**4) 確認・一般化テスト** 観点の理解・一般化度をみるため、コミュニケーションに必要な観点 3 つを基にした動画 8 種を視聴し、改善点を指摘するテストを実施した。前半 4 種は個人ワークと同様の課題、後半 4 種は新たに「誕生日パーティーに誘う場面」を設定した。各課題の中に 1 種のみ全て適切な正解動画を含めた。

**3. 手続き** **1) コミュニケーションに必要な観点の抽出** 「要素の抽出」「要素の整理」「観点名の命名」の 3 プロセスの達成率を算出した。「要素の整理」は 3 種の動画ごとに算出した。達成水準は①支援なしで自らプロセスを遂行した「達成」、②ヒント、もしくはモデル提示すると自分で取り組めた「ヒント・モデル提示」、③「ヒント・モデル提示」にさらに支援者の声掛けが必要だった「ヒント・モデル提示+支援」、④支援者が答えを提示した「答えの提示」の 4 水準とした。**2) 学習内容の理解・一般化** 確認・一般化テストについて、改善点に関する正解率を算出した。

最後に、3 つの観点が全て適切な動画を視聴した。**3) グループワーク** 必要な観点 3 つを基に、各班でロールプレイに取り組んだ。「誘う人」「誘われる人」「周囲の人」は交代制で、対象者は全ての役割を担えるようにした。**4) 確認・一般化テスト** 観点の理解・一般化度をみるため、コミュニケーションに必要な観点 3 つを基にした動画 8 種を視聴し、改善点を指摘するテストを実施した。前半 4 種は個人ワークと同様の課題、後半 4 種は新たに「誕生日パーティーに誘う場面」を設定した。各課題の中に 1 種のみ全て適切な正解動画を含めた。**3. 手続き** **1) コミュニケーションに必要な観点の抽出** 「要素の抽出」「要素の整理」「観点名の命名」の 3 プロセスの達成率を算出した。「要素の整理」は 3 種の動画ごとに算出した。達成水準は①支援なしで自らプロセスを遂行した「達成」、②ヒント、もしくはモデル提示すると自分で取り組めた「ヒント・モデル提示」、③「ヒント・モデル提示」にさらに支援者の声掛けが必要だった「ヒント・モデル提示+支援」、④支援者が答えを提示した「答えの提示」の 4 水準とした。**2) 学習内容の理解・一般化** 確認・一般化テストについて、改善点に関する正解率を算出した。

## III. 結果

### 1. コミュニケーションに必要な観点の抽出

コミュニケーションに必要な観点の抽出プロセスの達成率を算出した結果を図 1 に示す。

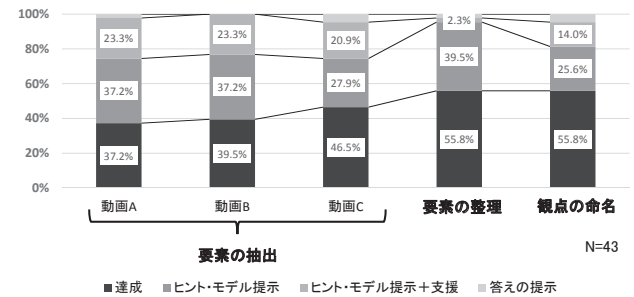


図1 観点の抽出プロセス 達成率

「要素の抽出」は課題の進捗とともに「達成」者が増加したものの、動画 C では「答えの提示」者が見られた。「要素の整理」はヒント・モデル提示を行うことでほとんどの対象者が遂行可能であった。「観点の命名」は「要素の整理」と比較し、「ヒント・モデル提示+支援」の割合が高かった。

### 2. 学習内容の理解・一般化度

確認・一般化テストについて、8 種の動画ごと正解率を算出した結果を図 2 に示す。

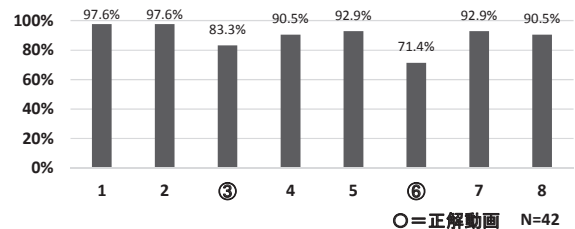


図2 確認・一般化テスト 正解率

適切できない動画は新たな課題でも正解率が 90%を超えていたが、正解動画は適切でない動画と比較し、正解率が低かった。

## IV. 考察

観点抽出のプロセスの達成率を見ると、「要素の抽出」プロセスは回数を追うごとに「達成」者が増えたため、学習効果があったものと言える。しかし、動画 C にも「答えの提示」者がいたため、動画の内容を含む視聴覚教材の再検討を行う必要があると言える。「要素の抽出」を繰り返し行ったため、多くの対象者が「距離」「声の大きさ」「表情」の観点ごとに整理できたものの、「観点の命名」は困難であった。今後は知的発達段階との関連を見る必要がある。

学習内容の一般化は、全体的に正解率が高かったため、コミュニケーションの観点の理解がなされていたと言える。正解動画の正解率は比較的良かったため、対象者は今回示した 3 つの観点以外の観点をもっていた可能性があり、多義的な解釈をしている様子が伺えた。

(SHIMADA, Hirosuke, HIRAI Takeshi, IMAEDA Fumio, KANNO Atsushi)